Der Vater der Buchdruckerkunst

～Johannes Gutenberg～

99k1086

Atsuko Amaki

目次

はじめに　1

第１章グーテンベルクの歴史　2

第２章４２行聖書　２８

まとめ　３０

参考文献　３３

Johannes　Gutenberg　３４

はじめに

活版印刷・羅針盤・火薬はルネッサンス時代の三大発明と呼ばれ、その後のヨーロッパの文化や社会の革新・発展に大きく貢献したといわれている。とりわけ活版印刷の発明によって、それまでの写本に比べて書物が著しくはやく大量生産されるようになり、これによって半世紀後の人文主義・宗教改革の思想がすみやかに広範にわたって伝播していったのである。

この技術を発明した Johannes　Gutenberg の名前は日本でもよく知られている。中学の社会科や高校の世界史の教科書には、必ずといっていいぐらいその名前が記され、この業績も紹介されている。しかし、グーテンベルクがどのような人生をたどったのかという段になると、はたしてどれくらいの人が知っているのであろうか？

本国ドイツにおける「グーテンベルク研究」でも、グーテンベルクやそのほかの印刷者が残した印刷物などを手がかりにした、書籍印刷の専門研究は著しく進んだが、グーテンベルク本人の生涯に関する史料は極めて限られており、未知の部分が多いのである。これらの限られた史料をもとに、グーテンベルクの生涯を紹介していきたい。

第一章　　グーテンベルクの歴史

１．出生から青年時代まで

１－１　黄金の町　マインツ Mainz

ヨハネス・グーテンベルクが生まれ、育った町マインツは、西部ドイツのライン川　Rhein　とその支流であるマイン川　Main　が合流する地点にある。ここは、北イタリアからアルプスを越え、ライン峡谷に沿って北上し、オランダなど低地地方に向かう交通の要衝にあるが、そのためすでに古代ローマの軍隊の駐屯地とされていた。その後、民族大移動の混乱のあと、急速に勢力を増したフランク王国の中核地のひとつとなった。

また、経済的にもマインツはケルン　Köln とともにライン地方の経済の中心地として重要な役割を果たすようになった。大規模な遠隔地商業に従事する大商人は、経済力が高まるとともに、自治を求める彼らの動きも強まり、マインツの都市行政を担う特権的な「都市貴族」になっていった。モノの製造面でもマインツは活発な動きを示していて、手工業ギルド[1]　Guild　であるツンフト Zunft が形成され、彼らの勤勉さと優れた仕事によってマインツの富は生まれ、

---

[1] ギルド　Guild（ドイツ語では、Zunft）は、各種の職業別組合のことで、組合員が相互に援助したり保護したり、あるいは何か共通の目的を遂行するためにつくられた仲間、組合、団体として定義できる。

そして都市行政に参与するようになっていった。

　また、都市貴族が考え出した終身年金制度では、金持ちの都市貴族たちは、その子供や若年の親類縁者たちのためにこの年金を買い、それには高い利子がついてふくらんだ。そして年金の受益者は、簡単な手続きで支払った金額よりも高額な利子を受け取ることができ、その差額はマインツ市の財政から支払われていたのである。この制度により、マインツ市の財政は圧迫され、ツンフトは税を負担するばかりで、終身年金などの利益享受もなく、都市貴族と対立するようになっていた。

　グーテンベルクが生まれた１４００年ころのマインツは、こうした状況にあり、都市貴族の出身であった彼の生涯は、まさにこのような階級間の対立抗争によって大きな影響をうけたのであった。

１－２　グーテンベルクの誕生

　グーテンベルクは、マインツで生まれた。彼の父親は、マインツの都市貴族でフリーレ・ゲンスフライシュ　Friele　Gensfleisch、母親はエルゼ　Else である。ヨハネスの父フリーレは、１３７２年に１度結婚するが、１３８６年にエルゼと再婚している。ヨハネスの父方の祖父、フリーレ・ゲンスフライシュはマインツの都市貴族であり、祖母はマインツの都市貴族ゲントゥス家の出身のグレーテ　Grete　Genthuss であった。ヨハネスの母方の祖母は、マインツの都

市貴族フュールステンベルク家の出のエンネヒン　Ennechin　zu　Fürstenberg であったが、祖父ヴェルナー・ヴィリッヒ　Werner　Wirich　は都市貴族ではなく、マインツで石を手広く扱う商人であった。

ヨハネスの父フリーレ・ゲンスフライシュは、グーテンベルクという名の屋敷に住んでいた。そのため、ヨハネスの一族は「ゲンスフライシュ」という名の他に、マインツの別の家系からもらった「ラーデン」と屋敷名「グーテンベルク」の名が加えられて呼ばれるようになったのである。しだいに「ゲンスフライシュ」より「グーテンベルク」の名の方が一般的になったと思われる。

グーテンベルクの正確な生年について、記した文書記録がないため、これまでさまざまな研究者がいろいろなやり方でこれを探ってきたが、いずれも決定的なものとはいえない。

アロイス・ルッペル博士　Dr.Aloys　Ruppel によると、ヨハネスの父フリーレは１４１９年７月１日から、１２月２７日までの間に亡くなっている。その翌年ヨハネスの名が初めて公式文書に記載されるわけだが、彼の兄フリーレ・ツー・グーテンベルク　Friele　Zu　Gutenberg　及び義理の兄に当たるクラウス・ヴィッツム　Claus　Vitzthum　（姉エルゼ　Else　の夫）と語らって、自分たちの異母姉に当たるパッツェ・ブラスホフ　Patze　Blashoff　との間で、父親の遺産に関する話し合いを行った。ヨハネスはこの時後見人なしで処理にあたった

ため、当時少なくとも２１歳に達していて、生まれたのは１３９９年より後ではなかったはずだということである。

また、『ヨハネス・グーテンベルク～人物と業績～*Johannes Gutenberg～Persönlichkeit und Leistung～*』の著者アルベルト・カプル Albert Kapr の説、および書籍出版に関する総合的な事典（*Lexikon des gesamten Buchwesens*）の記述によると、１４００年ごろである。

１－３　幼少年時代

この時代について記した記録文書は存在しない。そのためグーテンベルクに関する大部分の研究所はこの時代には触れていない。ところがカプルは間接的な傍証資料から大胆な推測を行っているので、それを紹介する。

グーテンベルクの父親は貿易商人として、読み、書き、計算の重要生を知っていた。母親も、小売商の娘としてその能力を持っていて、グーテンベルクは家でこれらを習得したものと思われる。

当時マインツにも都市学校というものがあり、市民に教育する場が存在したが、グーテンベルクはそうした学校へは通わなかったとみられている。というのは、これら民間の都市学校へは、同職ギルド所属の手工業職人がその子弟を通わせていたからである。この階層と対立していた保守的な都市貴族たちは、これを嫌ってその子弟たちを修道院付属学校へと通わせたのである。ゲンスフ

ライッシュ家は代々マインツの修道院とは友好な関係にあった。一族の多くの者は教会や修道院に多額の寄付金をだし、その見返りとして教会や修道院は、都市貴族の特権を支持していた。当時のマインツにはそうした修道院の付属学校もいくつか存在した。

その中でもグーテンベルクは、ザンクト・ヴィクター St.Victor 修道会付属学校に通っていた形跡がある。グーテンベルクの遠縁の１人ヤーコブ・ゲンスフライッシュ Jacob Gensfleisch が１４３３年から１４３９年に学校長職につくなど、この学校とゲンスフライッシュ家とは縁が深かった。そしてグーテンベルクは高齢になってもなお、この修道院に寄付を続けていた。

ヨハネスは通っていた学校でラテン語を習得した可能性がある。そして使用した教科書の一冊は、後期ローマ時代の文法学者アエリウス・ドナトゥス Aelius Donatus の『アルス・ミノール *Ars minor* 』であっただろう。

ところがグーテンベルクはその少年時代、町の政治をめぐるツンフトとの争いが原因となって、都市貴族であった父親に連れられ、マインツを何度か離れざるを得なかった。

１－４　大学生時代

ヨハネスが大学まで進んだかどうかは、はっきりとわかっていない。しかし彼の２人の従兄弟が、エアフルト大学 Universität Erfurt へ入学した記録があ

る。そして、１４１８年の夏学期に、「ヨハネス・ドゥ・アルタ・ヴィラ Johannes Du Alt Vila」という人物が登録していたことも確認されている。当時の学生は学籍簿に名前を記するときには、その出身地を書く習慣があったという。アルタ・ヴィラは、エルトヴィル Eltvil によく似ていて、同じ地名とみなすことができるのだ。このころマインツの都市貴族たちは、ツンフトから税金をかけるという脅しをうけており、マインツを離れていた。エルトヴィルは、マインツからそう遠くなく、ここには、ヨハネスの母が相続した家屋敷があったので、ヨハネスが当時住んでいたと思われる。

このエアフルト大学においてヨハネスはラテン語に磨きをかけたものと思われる。後に自分の印刷術によって、彼は聖書その他の書物を印刷したわけであるが、それらの書物は主にラテン語で書かれていたのだった。これらの書籍づくりの総監督であったヨハネスにとってはラテン語に対する十分な知識が必要不可欠であったわけで、ラテン語の知識が欠けていたとは考えられないのである。

１４１９年、グーテンベルクがまだ在学中に父フリーレが亡くなった。グーテンベルクは１４１９／２０年の冬学期に在学し、その終わりに学長から修了証書を授与されている。そしてその少し後、彼はアイゼナハ Eisenach 、フランクフルト Frankfurt を経てマインツに戻った。学生時代は終わったのである。

１４２０年には親族間で遺産に関する話合いが行われた。１４２７／８年にマインツ市との間で、兄フリーレとヨハネスの両兄弟が貰うことになっていた２０グルテン[2]の年金についての話し合いがついた。少なくとも１４２８年までは、父フリーレのたび重なる追放によって中断されたりしたことはあっても、ヨハネスはマインツに暮らしていた。

１－５　成人後のグーテンベルク

再び故郷マインツに戻ったグーテンベルクは、すでに成人して一人前の都市貴族になっていた。しかし、母方の祖父が小商人であったという４分の１の血の不足によって、彼は完全な都市貴族にはなれなかった。ゲンスフライッシュ家にとって最も重要な経済基盤は、貨幣鋳造組合で高い地位を占めることにあったが、グーテンベルクは４分の１の血の不足によって、この組合の成員にはなれなかったのである。

しかし、１４２０年代のグーテンベルク屋敷には、親類縁者のほかにコモフ Komof　とライゼ　Leize　と称する貨幣鋳造組合所属の職人が出入りしている。おそらくこの２人から金細工師としての技術を習得したとみられるのだ。金細工の技術は、活字の鋳造に決定的な意味を持つことになるのである。

---

[2] 当時の貨幣の価値については諸説があるが、職人の年間の所得は２５～５０グルテンくらいではないかとされている。

１４３０年１月１６日の文書には、すでにグーテンベルクが不在のため、彼に対する終身年金が半分に減額されたという通知がのこされている。

１４２９年以降グーテンベルクがマインツにいなかったことは確かであるが、この間彼がどこにいたかの記した記録文書は存在しない。確かなことはわからないが、この間どこかで金属加工に類した経験を積んでいたものと思われる。

ここでは、アルベルト・カプルの大胆な推測を紹介する。

当時のヨーロッパとりわけドイツにとって大きなできごとであったバーゼル Basel　宗教会議（１４３１－４９）との関連から、スイス　Schweiz　のまちバーゼルにグーテンベルクが一時滞在していたのではないかと、カプルは推測しているわけである。中世の宗教会議は、まさに今日の世界サミットやオリンピックといった感じであった。１４２９年半ばのマインツに、バーゼルで新たな宗教会議が開かれるであろうという噂がながれた。この時代の宗教会議には、各地から大勢の聖職者や王侯貴族たちが集まり、これを開催する町には活発な商取引と豊かな収入が約束されていたため、人々は宗教的というよりむしろ経済的な関心があった。バーゼルの町は開催に先立って、多くの教会や家々が化粧直しをするはずであった。そのために塗装工、工芸家、金細工師、じゅうたん職人、筆写生などが必要とされたのである。しかし残念ながら、グーテンベルクがこの機会にバーゼルで働いていたことを立証する資料は存在しない。し

かし、当時バーゼルに存在した手工業職人の組織「天国のツンフト」の会員になっていた可能性はある。これは、後にグーテンベルクがストラセブール Straßburg でつくり上げた印刷のための共同体の組織形態にとてもよくにているからである。

２．ストラセブール時代

２－１　ストラセブールへの移住

グーテンベルクがこのストラセブールに住むようになった直接の動機は、例の終身年金に関連してのことだった。１４３３年に彼の母エルゼがなくなり、その遺産は３人の子供たち、すなわち、フリーレ、エルゼ及びヨハネスに分与された。１４３４年、ヨハネスは母親エルゼの遺産として前年に受け取ったエルトヴィルの屋敷を兄フリーレに譲る。そして、姉エルゼはグーテンベルク屋敷に住むことになった。

ヨハネスは家屋敷を放棄して、年金のかたちで遺産を相続した。その過程で、それまでストラセブールで兄フリーレが引き出していた年金も、遺産調整分として弟ヨハネスに与えられることになったようだ。この年金受取地がストラセブールだったというのが、彼がここに住むようになった直接の動機だったのだ。

しかし、ヨハネスはこの年金をすんなりと受け取れたわけではなかった。当時マインツの市政をぎゅうじっていたツンフトは、対立する関係にあったグー

テンベルクに対して、年金の支払いを拒否したからである。彼は、１４３４年ストラセブールを訪ねたマインツ市の事務官、ニコラウス　Nicolaus　を業務不履行で逮捕せしめた。だが、２つの都市の間に争いが起こるのを恐れて、判事はグーテンベルクに訴えを見合わせるようすすめた。グーテンベルクは自身で封印した証書を発行した。その証書の記載内容は、ニコラウスの拘留をとき、あわせて未払いの年金３１０グルテンを支払うという趣旨で行った、宣誓を帳消しにするというものであった。

２－２　結婚

１４３６年、グーテンベルクは婚約不履行の訴訟事件の被告として、ストラセブ－ルの判事の前に現れた。原告はテュール家のエネリン嬢　Ennelin zu der iserin Tür　であった。裁判の記録は残っていない。以後グーテンベルクが、結婚したのか、子供がいたのか等は、いっさいわかっていない。

２－３　裁判記録

ストラセブール以降も彼の生涯については詳しくわからないままである。ただ知られているのは、いろいろな裁判記録に現れていることだけである。

１４３６年及び１４３９年にグーテンベルクはワイン税をストラクブール市へ支払った。このことは、次のワイン税にかんする台帳に記されている次の言葉から推測される。

「グーテンベルクは１．５フーデルと６オームのワインを保管していた。彼に課せられるべき税金は１２プェニッヒを除き、１４３９年のマルガレーテの日の前の木曜日に支払われた。……」

このことは、グーテンベルクの家には２０００リットルを越すワインが保管されていたことになる。

１４３６年、ストラセブールの靴屋クラウス・ショット Claus Schott は、グーテンベルクの結婚不履行訴訟の証人として出廷したときに、侮辱されたとしてグーテンベルクを告訴した。結局、名誉毀損で、グーテンベルクは１５グルテンの罰金の支払いを命じられて、一件は落着する。

２－４　ストラセブールでの仕事

１４３７年ごろからグーテンベルクは、金持ちの市民アンドレス・ドリッツェーン Andreas Dritzehen に研磨の仕事を、報酬を取って教えていた。グーテンベルクはそうした技術をこのころまでに習得していたことがこれからわかる。１４３８年の初頭、彼は近郊リヒテナウ Lichtenau の代官ハンス・リッフェ Hans Liffe と、ある共同事業に関して取り決めを結んだ。先のドリッツェーン及びアンドレアス・ハイルマン Andreas Heilmann もこの仲間に加わった。彼らはこの共同事業を通じて、次回のアーヘン Aachen 大救済巡礼行に関連して、巡礼たちに売るための手鏡をつくろうとしたのである。アーヘ

ンでは、代々ドイツ皇帝の戴冠式がその大聖堂で行われていた。その際救済用の手鏡が聖遺物の奇跡的な力を集めて蓄えるものと信じられ、巡礼者に売られていた。

この手鏡の材質は鉛と錫の合金でできていた。これこそは、印刷に取り組んだ際に鋳造した活字の材料だった。印刷術発明への技術的な前提のひとつが、こうして手鏡製造というかたちをとって、ひそかに準備されていたのである。

２－５　新たな秘密の事業

手鏡製造が終わった後、あるいはすでに並行してグーテンベルクは新たな事業に取り組んでいた。後のグーテンベルクから秘密の術を教わろうとしていたアンドレアス・ハイルマンとアンドレアス・ドリッツェーンは、授業料を払うかたちで助手の役割を務めたことと思われる。それに加えて、今度はコンラート・ザスパッハ　Conrad　Sahspach　という男が圧搾機を組み立て、金細工師のハンズ・デュネ　Hans　Dünne　が鋳型を彫る仕事を委託された。

ところがこれに先立つ１４３８年の暮れに、協力者の１人であったアンドレアス・ドリッツェーンがペストで死んでしまい、１４３９年、その弟のイエルゲ・ドリッツェーン　Jerge　Dritzehen　がグーテンベルクに対し資金の返還を求め訴訟を起こした。

その裁判の記録がウィンクラー　Wenkler　とシェプフリン　Schoepflin　によ

って、１７６０年に発見された。同年シェプフリンにより『印刷に関する弁護 *Vindicae Typographicae* 』が著された。レオン・ド・ラボルド Leon de Laborde は、シェプフリンのこの著作を８０年後に読み、『ストラセブールにおける印刷の始まり、ストラセブールにおけるグーテンベルクの不思議な仕事の研究、そして１４３９年の裁判 *Debuts de l´Imprimerie a Strasbourg---* 』を１８４０年に著した。ラボルドは可動式の活字を使った印刷の始まりは、オランダにあるということを示そうとするためにこの裁判記録を利用した。オランダ及び自説に有利な部分だけ図版に残したことも考えられる。しかし今に残る図版は、断片といえども貴重な資料である。それらを紹介する。

（宮田修二（１９９２）:「グーテンベルク聖書の行方」東京：図書出版社）

> Andreas Drutyehen selig hatt IIII stücke inn einer pressen ligen, do hatt Gutenberg gebetten, das ir die uss der pressen nement und die von ein ander legent uff das man nit gewissen kune was es sy, dan er nit gerne das das jemand sihet.
>
> 故アンドレアス・ドリッツェーンは、印刷機の中に４個の小片（stücke）を持っていた。グーテンベルクは印刷機械から立ち退き、そして離れるよう要求した。彼は誰かがそれを見るのを望まなかったので、それが何か誰もはっきりと見ることができなかった。

４個の小片が何かはわからないが、グーテンベルクにとって、きわめて重要なものだったのであろう。

Da hastu pressen gemacht und weist umb die sache do gang dohin und nym die stücke uss der pressen und zerlege sü von einander so weis nyemand was es ist,

あなたは印刷機とともに働いていたのだから、あなたはそのことを知っている。だからそこへ行って印刷機から小片（stücke）を離しなさい。それが何か誰にもわからないように。

秘密保持にはグーテンベルクはとても気を使っていて、アンドレアス・ドリッツェーンの死亡にともなって秘密の術が漏れるのを防ぐために、アンドレアスが圧搾機のなかに残してきたものを使用人にわざわざ取りに行かせ、あわせてこの機械の解体すら指示しているのである。

Er wer ein spiegelmacher.

彼は鏡職人である。

Es were göckel werk

それは妖術である。

Item Hans Dünne der goltsmyt hat geseit, das er vor dryen joren oder doby Gutenberg by den hundert guldin abe verdienet habe alleine das zu

dem trucken gehöret.

金細工人ハンス・デュネは供述した。およそ３年前、印刷術に必要なものをグーテンベルクに売って約１００グルテンを得た。

このことからわかることは、すでに１４３６年にはグーテンベルクが秘密の事業をはじめていて、その資金稼ぎとその準備事業をして協同組合方式で手鏡製造に取り組んだということである。この仕事のやり方は、資本と労働能率と発明のアイディアの３つを結集した協同事業という組織形態こそ、後に彼が活版印刷術の発明と実践の際に用いたやり方そのものであり、その原初的なものが手鏡製造で示されたというべきであろう。

次に注目すべきことは、この裁判の証人がそろって自分たちが従事してきたことについて、「技術と冒険」とか「技術と発明」といったあいまいな言葉で表現していたという点である。つまりグーテンベルクや仲間たちはその秘密を外部に知られないために、裁判に勝つための必要最小限のことしか供述しなかったのである。

第三に重要な点は、マインツから転入してきたグーテンベルクに対して、ストラセブール市民が示した信用の念である。このことは、その資金提供者や仕事仲間に対してグーテンベルクが示したであろう優れた技術の腕前によってのみ説明できるものなのである。証言によって、彼が当時３つの仕事に従事して

いたことが明らかにされている。１つは宝石の研磨、１つは鏡の製造、もう１つは「事業」といったあいまいな表現で呼ばれてはいたが、研究者の多くによってすでに印刷術だとみなされているものである。

この裁判では、イエルゲ・ドリッツェーンに対してグーテンベルクが１５グルテンを支払うことで決着をみた。

１４４３年頃グーテンベルクは、もし戦いが始まった場合にストラセブール市に対して、馬を提供することになっているコンストロフェラー　Konstrofeler というリストに、半頭分を登録した。１４４４年1月２２日、グーテンベルクは傭兵に対するストラセブール市の出征召集に対する、金細工ギルドのリスト上で仲間うちのトップにランクされる。

２－６活版印刷術発明

グーテンベルクはすでに１４３６年には印刷の仕事に携わっていた。先の裁判の判決文がでた１４３９年ないしはその少し後に、最初の印刷物を世にだしていたものと推測されている。また、グーテンベルクが１４４０年にはストラセブールに滞在していた。つまり、「書籍印刷術はグーテンベルクによってストラセブールで１４４０年に発明され、マインツにおいて１４５０年頃までに完成していた」とみることができる。

グーテンベルクがまず取り組んだ印刷物は、一般に『ドナトゥス　*Donatus*　』

と呼ばれていた小型のラテン語文法書であった。これはラテン語の教科書兼辞書で、それまでヨーロッパで最も頻繁に筆写されていた書物であった。

２－７　活版印刷技術

ヨーロッパでは長い筆写時代の後、おそらく１４世紀の最後の２，３０年間に宗教画の木版印刷が、そして１４，５世紀には、木版によるカルタの印刷が行なわれるようになっていた。木版印刷では、紙を版木の上に置いて上からこすりつけるため、１枚の紙の片面にしか印刷できなかった。つまりローマ字のアルファベットの印刷に対して、木版は向いていなかったのである。

いっぽう活字を用いた印刷方法自体は、グーテンベルクよりずっと早く中国や朝鮮半島で行なわれていた。

グーテンベルクは、鉛と錫の合金によってアルファベットの活字を鋳造し、それらを自由に組んで組版をつくり、その上にインクを塗って圧搾機にかけて印刷する方法を生みだした。グーテンベルクの優れた発明は次のとおりである。

第一に活字であるが、金属や木に文字を彫って砂の鋳型をつくり、そこに溶けた金属を流し込んで活字をつくっていた。グーテンベルクは、活字を組版にして可動活字として印刷する方法を考え出したのである。

第二に、グーテンベルクは活版印刷に適したインクを作り出したのである。従来筆写や木版印刷に用いていたのは水性インクであったが、これは鉛合金製

活字にはのりが悪く、煮沸アマニ油を用いた油性のインクに改良を加え、のりのよいインクをつくったのである。

第三に、グーテンベルクの印刷機の製造である。マインツやストラセブールには、ブドウの実を絞るのに用いられた圧搾機があった。こうしたものにヒントを得て、圧搾式の印刷機をつくることができたのである。

第四は、グーテンベルクの生産体制についてである。さまざまな職種の人々をひとつの事業目的に結集して、効率よく生産していく共同事業体制をグーテンベルクが早くから採用して、印刷の大量生産方式を確立したのである。これは、グーテンベルクが優れた経営者であったことを証明するものなのである。

３．マインツへの帰還

３－１マインツでの仕事の再開

１４４８年に故郷のマインツに帰ってきたときには、グーテンベルクはすでに４８歳前後になっていた。グーテンベルクがマインツへ帰った後、約１０年間どのような行動をとっていたのかを示す資料はまったく残っていない。

１４４８年、身内のアルノルト・ゲルトゥス　Arnold　Gelthus　を説得して、１５０グルテンを借りさせた。この時グーテンベルクは、彼の伯父が持っている家「ツム・ユンゲン　Zum　Jungen　」に住み、この家に自分の住居と印刷所を造った（グーテンベルク屋敷印刷工房）。

当時グーテンベルクが、まず何よりも印刷したいと考えたのは、均一の内容の『ミサ典書　*Das　Messbuch*　』を大量につくりだすことだった。ミサはカトリックの祭儀の中心をなすものであり、『ミサ典書』はそれを執り行う際の、いわばハンドブックであった。

ところが、この『ミサ典書』も、何度も書き写していく筆写の過程で、しばしば書き間違いや文章の修正、あるいはテキストの故意の歪曲という事態が起こっていた。このためニコラス・フォン・クース　Nicolaus　von　Kührs　はカトリック教会の全地域に、統一的に書かれた『ミサ典書』の出現を求めていたのである。そしてその期待に応えるべくグーテンベルクは『ミサ典書』の印刷を志したものと考えられる。

３－２　ヨハン・フスト　Johann　Fust　との出会い

こうして聖書の印刷を志すようになったグーテンベルクにとって当面の問題となったのは、聖書の印刷に必要な資金だった。そして、マインツの市民で実業家であった、ヨハン・フストと提携することになる。彼は、マインツの商人で、それまで『ドナトゥス』などの写本を売るために各地の大学都市を渡り歩いていたものとみられている。そのころグーテンベルクはでき上がった『ドナトゥス』を販売してくれる商人を必要としていた。こうしたところからフストとグーテンベルクの出会いが生まれたものと思われる。

グーテンベルクは１４４９年に、フストから８００グルテンという大金を融資してもらっている。この金で聖書を印刷するために必要な立派な印刷所を建設することができたのである（フンブレヒド　Hünbrehid　屋敷印刷工房）。フストと提携後も自宅の印刷所はそのままにしておいた。この２つの印刷所について最初に言及したのは、１８８９年、カール・ディアツコ　Karl　Dziatzko　である。

グーテンベルクの自宅の印刷所には、少なくとも２人の職人、ハインリッヒ・ケッファ　Heinrich　Keffer　とベヒトルフ・フォン・ハーナウ　Bechtolff　von Hanau　が働いていた。またフストの資金によって設立された印刷所には、フストとグーテンベルクの他、すくなくとも１人の職人、ペーター・シェッファー Peter　Schöffer　が働いていた。

１４５０年、フストは融資に対する担保として、組み立てられた印刷機その他の機械設備一切と付属の材料、そしてできあがる予定の作品などを指定して、グーテンベルクとこれらを定めた契約を結んだ。この提携の目的は、疑いもなく大型の聖書の印刷であった。

１４５４年、その提携によって『４２行聖書　*Die　42-zeilige　Bibel*　』が産み出された。それは、『グーテンベルク聖書　*Gutenberg　Bibel*　』とも呼ばれる。

３－２　ヘルマスペルガー法律文書　*Das　Helmaspergerische*

Nütarietsinstrument vom 6. Nov. 1455

グーテンベルクは『４２行聖書』の完成間近に約束不履行でフストから訴えられる。その裁判の様子は現存する『ヘルマスペルガー法律文書』でうかがい知ることが可能である。原本はゲッティンゲン大学図書館 Göttingen, Universitätsbibliothek に、今でも保管してある。この文書は、１８世紀のグーテンベルク研究者ヨハン・ダヴィート・ケーラー Johann David Köler がその著書『グーテンベルクの名誉回復 *Ehren－Rettung Gutenbergs* 』の中でそのテキストを挿入した後（１７４０年）長い間行方不明になっていたが、１８８６年になって偶然ゲッティンゲン大学で再発見された。

この文書には、おそらくグーテンベルクによって書かれたであろう、次のような題辞がある。

Instrumentum eyns gesaczten dages daz Fust sine rechenschaft gethane vand mit dem syde beweret hat.

「フストがその記述を行い、その内容を宣誓によって確認した設定日に作成された法律文書」

上記の題辞中に暗示してあるごとく、その原稿は、主としてフストが１４５５年１１月６日に『マインツの裸足の僧侶達 *Mencz zu berfus－sen* 』の修道院において誓いをたてたものの記憶であり、それは彼が同じ年にグーテンベ

ルクに対して起こした訴訟の裁決において、彼に命令を下したものである。この文書はバンベルク　Bamberg　市民ウルリヒ・ヘルマスペルガー　Ulrich Helmasperger　が公証人として記録したものである。

この苦情の中でフストは、自分としてはよそから金を借りてグーテンベルクに融資し、その間利息を払い続けたが、グーテンベルクからはまったく返済を受けていないと述べ立てている。

グーテンベルクは『聖書』が完売される前に裁判所の裁定がでてしまい、抵当に入れていた印刷工房や印刷機器、その他刷り上っていた印刷物などをフストに手渡さざるを得ないことになってしまい、敗訴したのである。

『４２行聖書』の印刷という一大事業を推進するために金を貸したフストには、印刷術の完成とかこの大部の作品を芸術的・美的観点からみて完璧なものにしようといったことへの関心はみられない。その関心はもっぱら、多大な利益を生み出す高価な商品である『４２行聖書』が一刻も早く完成し販売することにあった。そのため２度にわたって大金を投入してその完成を待ったのだが、完璧主義を貫いてじっくり時間をかけていたグーテンベルクの態度に業をにやして提訴したのであろう。

また、フストとしては聖書印刷のために大金を貸したのであって、自分には関係のないグーテンベルク工房のためにその金の一部を流用したことは許せな

かったのであろう。

フストは印刷所をグーテンベルクから奪い取った後で、そこを管理するのにペーター・シェッファー・フォン・ゲルンスハイム　Peter　Schöffer　von Gernsheim　を選んだ。

ペーター・シェッファーは、１４３０年頃マインツ近辺のライン河に臨んだ小村ゲルンスハイムで生まれ、１４４９年にパリで学んだ。彼はペン習字に優れていたため、写本の彩飾者になったといわれている。

３－４　再出発

グーテンベルクがフストに敗訴し、その後必要な金銭上の援助を見出すことができた。マインツ市の高官、名誉博士にして地方行政長官である、コンラート・フメリー　Conrad　Humery　が援助を申したてたのである。グーテンベルクは６０歳に近かったが、フストに退けられた以降も活発に活動した。

１４５８年頃、グーテンベルクはドナトゥス／カレンダー・タイプの活字をバンベルクのアルブレヒド・プフィスター　Albrecht　Pfister　に売却する。そして１４６０年頃『３６行聖書』を印刷した。

１４６０年には、グーテンベルクはカトリコン・タイプを製作し、ラテン語文法と辞書を合わせた『カトリコン　*Katolicon*　』を印刷した。

４．晩年のグーテンベルク

４－１　エルトヴィルへの亡命

１４６２年、マインツはアドルフ２世　Adolph　II　による略奪を受けた。フストの家は焼かれ、印刷所は破壊された。

１４６５年アドルフ２世は、グーテンベルクを自分の宮廷の従者の１人に任じた。アドルフ２世が、グーテンベルクの発明の有用性を認めたものと思われる。任官といっても特別の仕事があるわけではなく、いわば名誉職であった。そのわりには待遇はよく、毎年宮廷服、２１８０リットルの穀物、２０００リットルのワインが支給されることになった。これには税金はかけられず、すべて自分で使うことができた。老後の生活が保証され、長い苦労の歳月の後にようやく晩年の平穏な日々が訪れたのだった。

１４６６年、グーテンベルクが製作したカトリコン活字を収めた印刷所が、マインツに近いエルトヴィルで操業した。彼の親戚のヘンリーとニコラス・ベヒテルミュンツェ　Henry　und　Nicholas　Bechtermüntze　兄弟によるものである。１４６７年、この印刷所から生まれた本があって、『ラテン語・ドイツ語辞典　*Vocabularius　ex　puo*　』として知られている。

４－２　グーテンベルクの死

グーテンベルクは廷臣の身分と余暇を、長くは享受しなかった。彼がいつ亡

くなったかは正確にはわかっていないが、１４６８年２月に亡くなったという説もある。６８歳前後だったと推定される。彼の死の状況も何もわかっていない。家族を誰か残したのかどうかもわからない。

絶え間ない戦争、疫病、病気、傷害など、今日とは比べものにならないくらいの死の危険にさらされ、平均寿命もずっと低かった１５世紀にあってこの年齢まで生きたということは、かなりの長生きだったといえるだろう。

彼にとって仕事とは、絶えざる創造のプロセスであった。そうした目標追究の生の中にあってこそ、晩年に至るまで精神の若さと、生き生きした意識を保ち続けることができたのであろう。

４－３　『ケルン年代記　*Cronica van der hilliger Stat Coellen. Coellen, 1499.*』

印刷物の中にグーテンベルクの名が初めて登場するのは、ヨハン・ケンホフ Johann Kölhoff により１４９９年に制作された『ケルン年代記』である。

グーテンベルクによって発明された活版印刷術は、またたくまにドイツ国内及び近隣の諸国に伝わっていった。その中でもケルンはバンベルクやストラセブールとともに、いち早く印刷術が伝播した土地である。マインツのペーター・シェッファーの印刷所で修行したウルリヒ・ツェル Ulrich Zell が１４６５年頃ケルンに自分の印刷所を開設した。その印刷所を継いだヨハン・ケルホフ

が『ケルン年代記』の中で、「印刷の原型はオランダ」と記載したことから、印刷術の発祥地に関してさまざまの論争が展開した。

以下は『ケルン年代記』のリーフ３１２の５行目から２０行目にかけての引用である。

（宮田修二（１９９２）:「グーテンベルク聖書の行方」東京：図書出版社）

In den iairen uns heren do men schreyff MCCCL, do was eyn gulden iair, do began men tzo drucken ind was dat eyste boich dat men druckde die Bybel zo latijn, ind wart gedruckt mit eynre grouer schrifft as is die schrifft dae men nu Mysseboicher mit druckt. Item wiewoil die kunst is vonden tzo Mentz, als vursz up die wijse als dan nu gemeymlich gebruicht wirt, so is doch die eyrste vurbydung vonden in Hollant vyss den Donaten, die daeselffst vur der tzijt gedruckt syn… Mer der eyrste vynder der druckerye is gewest eyn Burger tzo Mentz ind was geboren vä Straissburch, ind hiesch joncker Johan Gudenburch.

主の年１４５０年に（それはゴールデン・イアーであった）、人々は印刷を始めた。そして最初に印刷されたのは「ラテン語聖書」であり、「ミサ典書」を印刷するのに用いられたものよりもっと大きな活字で印刷された。この技術はマインツで発明されたが、これは

現在通常使われている様式である。しかしながら、この原型はオランダで発明されたものであり、そこではマインツよりだいぶ前に「ドナトゥス文法」が印刷された。…なお印刷術の最初の発明者はマインツの市民であり、彼はストラセブールで生れたが、その名はヨハン・グーテンベルクと呼ばれた。

１６世紀までは、グーテンベルクの印刷史初期における地位は確立されておらず、その頃になって初めて、グーテンベルクの協力者であるペーター・シェッファーの息子で後継者となったヨハン・シェッファー Johann Schöffer が出版した感謝の言葉の数々によって確かなものとなった。

それは、ヨハン・シェッファーによって１５１４年に出版された、リヴィウス『ローマ史 Livy.－*Romische Historie.* Mainz, Johann Schöffer, 1514.』に書かれた献呈の辞の中にあり、「印刷術を発明したのは、自分の父親ではなく、ヨハン・グーテンベルクである」とはっきりと認めている。

第２章　　42行聖書

１－１　『４２行聖書』

『４２行聖書』は、グーテンベルクの最も優れた作品である。これはほとんどのページが４２行で印刷されていることから、このように呼ばれている。当時１６０から１８０部印刷されたが、現存するものはあわせてわずか４８部だ

けである。４０４mm＊２９２mmで全２冊から成る。修道院のミサなどで使用するための、旧・新約を合わせたラテン語のウルガータ聖書である。ブックマークには牛革のボタンがついており、装飾は顧客の好みに合わせて、印刷後に水性インクで手書きされた。

当時、新しい印刷技術は黒魔術や悪魔の仕業として非難する動きもあったため、文頭に朱を入れ、外見は中世写本に見えるように腐心したあとが見られる。湿らせた紙を用いた手引き印刷ならではの、紙の凹凸が見られる。

『４２行聖書』は単に活版印刷の最初の本というだけで貴重なのではない。インクの品質、活字、行間の取り方、当時の手彩飾、紙質、製本技術等のすべてについて現代の書籍にとって手本となっている。

１－２　日本と『４２行聖書』

１９８７年、丸善株式会社が５３９万ドルで『４２行聖書』を落札した。欧米以外の地域で、今回初めて所有されることとなった。上巻のみの完本で、マインツにて彩飾されたものである。

１９９６年、慶応義塾大学付属図書館がこれを所蔵した。

１８６２年慶応義塾の創設者の福澤諭吉が、遣欧使節の１員としてヨーロッパを訪問した。そこで彼が使用していた西航手帳に、グーテンベルクの『４２行聖書』に関するメモが残されていたのである。

（高宮利行（１９９９）:「グーテンベルク４２行聖書」東京：丸善株式会社）

１４４０　独逸にて出板（版）

ラテン語の書　此れを欧州第一の板（版）

なりと

１８６２年8月２５日、ロシアのザンクト・ペテルスブルク帝国図書館　St. Petersburger, Bibliotheca Imperias. の訪問者名簿に、福澤諭吉、高杉彦三郎、森鉢太郎、山田八郎、箕作秋坪、斎藤大之進、松本弘安の名前が書かれてあったのである。

彼らが見た『４２行聖書』は、１８５８年から１９３１年まではザンクト・ペテルスブルク帝国図書館が所蔵していたが、現在はコロニー（スイス）ボドマー図書館　Colgny, Switzerland, Bibliotheca Bodmeriana. が所蔵しているものである。

まとめ

グーテンベルクの生涯で大きな転機は、１４１０年～１４２０年代のマインツの市民蜂起であった。

ヨハネスの父親フリーレは貴族であったため、彼の一家はたびたび故郷のマインツを離れなければならなかった。しかしヨハネスの４人の祖父母のうち３

人は貴族の出身であったが、母親エルゼの父ヴェルナー・ヴィリッヒが貴族階級の出身でないために、ヨハネスは非常に腕のよい職人であるにもかかわらず、貨幣鋳造業者ギルドへの入会も認められなかった。ギルドからも認められず、市民からは行動を束縛され、一族ともうまくいかないグーテンベルクは、次第に世間に対して反抗的になってゆく。そしてストラスブールに逃れ、新しい事業を興すが、仲間の死亡に伴って訴訟を起こされた。

欧米のグーテンベルクに関する伝記のほとんどは、グーテンベルクは金細工師として一流の技術を持っていたが、経済的な観念はほとんど持ち合わせていなかったとしている。しかし、それはどうだろうか。

グーテンベルクの行くところ、彼のまわりには多くの金銭的トラブルが絶えなかった。１４３９年のイエルゲ・ドリツェンとの裁判以来、種々の裁判に登場するが、これらの裁判の争点から判断して、グーテンベルクはお金に対してたいへん執着心の強い人物だったのではないか。

活版印刷術の発明は、火薬及び羅針盤とともに中世の３大発明と言われている。しかし一口に活版印刷術の発明といっても、組版、印刷機、活字、活字ケース、インク、インクボールといった多くの要素の発明と紙の応用から成り立っているのである。それまでまったく存在しなかった、これらの１つ１つをグーテンベルクが考え出し、使用していったのである。彼のもって生れた能力と

金細工師としての経験でもって、困難な問題を１つ１つ解決していった。またインクの合成のための化学の知識なども取得していたのである。

マルティン・ルター Martin Luther の宗教改革も、コペルニクス Nicolaus Copernicus の地動説も、マルクス Karl Marx の社会改革も、アインシュタイン Albert Einstein の相対性理論をいった、すべての「歴史を変えた」情報や理論は、グーテンベルクの発明した活字と印刷機によって、本として形作られ伝達されたのである。グーテンベルクが存在しなかったら、これらの情報や理論がでてきたとしても、世の中に大きな影響をもたらしたかどうか疑わしい。グーテンベルクの発明は、世界中の文化を支えているのである。

とにかく、本づくりが今日鉛合金活字を用いない電算写植方式に取って代わられたとしても、グーテンベルクが発明した活版印刷術の原理そのものは書物をつくる方法としては変わりがないのである。そしてマルチ－メディアの発展にもかかわらず、文化の重要な担い手としての書物や印刷物は今後も決して消えていくものではないと、人々は確信するのである。

参考文献

宮田修二（１９９２）:「グーテンベルク聖書の行方」東京：図書出版社

高宮利行（１９９９）:「グーテンベルク４２行聖書」東京：丸善株式会社

戸叶勝也（１９９７）:「グーテンベルク」東京：株式会社清水書院

フランク・Ｂ・ギブニー（１９７３）:「ブリタニカ国際大百科事典」５、１０ 東京：株式会社ティビーエス・ブリタニカ

Lange, Thomas V. **（１９９７）:「***A Triptych of llluminated Leaves on Vellum from the Huntington Library's Gutenberg Bible / with an introduction by Thomas V. Lange.ll* **」東京：**Yushodo

大輪盛登（１９８８）:「グーテンベルクの鬚～活字とユートピア～」東京：株式会社筑摩書房

Johannes Gutenberg

Der Buchdruck, der Magnetismus und das Schießpulver sind die drei großen Erfindungen der Renaissancezeit. Danach haben sie der europäischen Kultur und der sozialen Entwicklung gedient.

Besonders kann man mit der Erfindung des Buchdrucks schneller und mehr Kopien herstellen, als mit Handschriften. Humanistisches Gedankengut und Ideen zur religiösen und sozialen Veränderung haben sich so schnell und weit verbreitet.

Der Mann, der diese Kunst erfunden hat, war Johannes Gutenberg. Und sein Name ist auch in Japan bekannt. Aber man weiß nicht genug, wie er sich durchs Leben geschlagen hat. Ich denke, dass wir seine Anstrengung kennen müssen. Ich danke für seine Erfindung, deswegen möchte ich das Leben und Werk Johannes Gutenbergs vorstellen

Das erste Kapitel beschreibt Gutenbergs Kinderheit und Jugend. Gutenberg war ungefähr 1400 in Mainz geboren. Er ist zur St.Victor Schule gegangen um Latein studieren zu können. Und dann hat er das Studium in Erfurt abgeschlossen.Wenn er erwachsen war, hat er die Kunst des Metalarbeit trainiert. Und die Kunst hat zu der Herstellung der Typen.

Das zweite Kapitel beschreibt Gutenbergs Zeit in Straßburg. Er hat in Straßburg

gewohnt, um eine Rente seiner Mutter zu bekommen. Er war gleichzeitig ein Spiegelmacher und ein Metallarbeiter. Er hat sich an der Erfindung des Buchdrucks versucht. Er hat die Druckmachine, die Type, den Typenkasten, die Tinte, den Tintenball, und die Papier geschafft. Zuerst hat er *Donatus* gedruckt, um Mittel zu verdienen. Das war ein lateinisches Kursbuch und Wörterbuch. Das war am maistens Handschrift im Europe 15.

Das dritte Kapitel beschreibt Gutenbergs Zeit in Mainz. Man kann nicht wissen, warum er zum Mainz zuruckgekehrt ist. Er wollte den Inhalt des Messbuch vereinigen. Er hat den Buchdruck der Bibeln begonnen. Als Ergebnis hat er die 42-zeilige Bibel hergestellt, die das schönste und teuerste Buch der Welt ist. Man hat sie auch Gutenbergs Bibel genannt.

Das vierte Kapitel beschreibt Gutenbergs Zeit in Eltvil. Adolph II hat Mainz geraubt. Adolph II hat die Erfindung Gutenbergs anerkannt. Somit war Gutenberg auch im Alter versorgt. Ungefähr 1468 war er im Alter von 68 Jahren gestorben.

Die Erfindung Gutenbergs hat aus der Druckmachine, der Type, dem Typenkasten, der Tinte, dem Tintenball und dem Papier bestanden. Gutenberg ist alle diese Ideen gekommen und hat sie umgesetzt. Die Type und die Druckmachine, die Gutenberg erfunden hat, hat das Buch hergestellt, um alle Information und Thorie mitzuteilen. Die

Erfindung Gutenbergs schützt die Kultur in der ganzen Wert.